

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 臨床・健康教育学系・助教

氏 名 岩本 佳世

研究期間 令和 2 年度

研究プロジェクトの名称	特別支援学校（知的障害）での場面緘黙を示す自閉スペクトラム症児童に対する発話指導の効果
研究プロジェクトの概要	<p>場面緘黙とは、DSM-5 では、「他の状況で話しているにもかかわらず、話すことが期待されている特定の社会的状況（例：学校）において、話すことが一貫してできない」と記載されている（APA, 2013）。一方、場面緘黙と発達上の問題の併存が多いことが指摘されている（大村, 2017）。しかしながら、場面緘黙を示す自閉スペクトラム症（以下、ASD）児を対象とした発話に関する指導方法は、十分に検討されていない。新学習指導要領では、発達障害を含む多様な障害に応じた自立活動の指導の重要性が示されている（文部科学省, 2018）。本研究は、自立活動における効果的な指導方法として、今後活用されるであろうことが期待できる。</p> <p>本研究では、(a) 場面緘黙を示す ASD 児童に対する発話状況のアセスメントについての予備的検討を行うこと、(b) 特別支援学校（知的障害）で場面緘黙を示す ASD 児童 1 名を対象に、アセスメント情報に基づいた発話指導を自立活動の時間に行い、その効果を検討することを目的とした。</p>
研究成果の概要	<p>場面緘黙を示す児童が安心して話せるかどうかを決定する要素は、その場所にいる人や物理的な場所や状況だけでなく、その時に行われている活動も重要である（McHolm et al., 2005；園山, 2017）。本研究では、場面緘黙を示す ASD 児童 1 名を対象に、「人」「場所」「活動」ごとの発話状況に関するアセスメントを実施し、その情報に基づいて発話指導プログラムを作成した。また緘黙児は、ASD 特性の一つである感覚過敏を有していたため、この発達特性に対する配慮も発話指導プログラムに組合せた。その結果、緘黙児の担任教師への発話状況に改善が見られた。今後は、自立活動の時間等の学校場面において、クラスメイトとの発話を含むコミュニケーションの改善が必要である。</p>
研究成果の発表状況	<p>Iwamoto, K. (2021) Utterance training to a student with autism spectrum disorder who shows selective mutism. 15th annual autism conference.</p> <p>岩本佳世 (2020) 行動問題を示す自閉スペクトラム症児童へのトークン・エコノミー法を用いた着替えの遂行に対する指導効果：知的障害特別支援学校での日常生活の指導場面を通して。上越教育大学研究紀要, 40(1), 181-189.</p>
学校現場や授業への研究成果の還元について	<p>本学で開設している授業において、場面緘黙を示す自閉スペクトラム症児童に対する発話状況のアセスメント方法、及び発話指導についての事例を紹介し、発達障害を含む多様な障害に応じた指導の講義・演習を行う。</p>